

宮城県七ヶ浜町に江戸時代から伝わる オウムガイ（軟体動物門：頭足綱）の漂着個体

岡本 泰典¹・福田 宏²

A drifted shell of *Nautilus pompilius* (Mollusca: Cephalopoda) handed down from the Edo Period at Shichigahama-machi, Miyagi Prefecture, the Pacific coast of northern Honshu, Japan

Yasunori OKAMOTO¹ and Hiroshi FUKUDA²

Abstract

Empty shells of a tropical cephalopod *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758 (Nautilida: Nautilidae) are known to be drifted to the coasts of the Japanese Archipelago, but it has been believed that no record was present on the Pacific coasts of the Tohoku District, northern Honshu, where is distant from the Kuroshio and the Tsushima Current. However, a drifted shell of the species has been handed down since 1812 (Bunka 9 in the Edo Period) in the Suzuki Family, Shichigahama-machi, Miyagi-gun, Miyagi Prefecture. According to a tradition in the Suzukis, the shell appeared as attached to a sea turtle from off Shichigahama, and the history of the drift and preservation was recorded in old literature. Since then, the Suzukis have called the shell "Fuketsu-no-kai" and carefully preserved it as their heirloom. The name Fuketsu-no-kai is a probable corruption of "Kuketsu-no-kai" that is one of the Japanese synonyms of the species in the Edo Period. In Niigata Prefecture, the drifted shells of the present species are called Kuketsu-no-kai and revered. Therefore, this folklore is assumed to have been introduced into the Pacific coast of Miyagi Prefecture by religious people. The present shell is thought to be a highly important specimen in the contexts of natural history, historiography and folkloristics: the present shell is a very rare case of the drift of the species into the Pacific coast of the Tohoku District; the detailed story of the drift can be documented by old literature; the present shell is a good example showing an old Japanese folklore of worship of the species.

Key words: *Nautilus pompilius*, old literature, good luck charm, Tohoku District

はじめに

オウムガイ *Nautilus pompilius* Linnaeus, 1758は、東南アジア～オーストラリア北部の熱帯海域に棲息する頭足類（オウムガイ目 Nautilida：オウムガイ科 Nautilidae）の一種である（窪寺 2000）。本種も含めオウムガイの仲間は、殻の内部に浮力調整のための気房を持っており、そのため死後に殻のみが海面に浮上し、海流に乗って遠隔地にまで運ばれることが少なくない。日本列島にも、黒潮および対馬暖流によって運ばれた殻が、日本海・東シナ海・太平洋（関東以南）の沿岸にしばしば漂着することが知られ（浜田 1965；小島・加藤 1987；中西 1990；

石井 1999）、最近10年間においても和歌山県白浜町（久保田ほか 2010）、愛知県渥美半島の田原市（西 2013）、神奈川県相模湾沿岸の逗子・鎌倉両市（池田ほか 2006）などから報告されている。その一方、両海流の影響が直接及ばない東北地方太平洋沿岸（福島・宮城・岩手各県）は、熱帯海域からの漂着物自体が極めて少なく、オウムガイの漂着記録もない。従来、本州太平洋側でオウムガイ漂着の北限と認識されてきたのは、小松崎（1907）による常陸大津（現在の茨城県北茨城市大津町）の事例であった。

ところが驚くべきことに、茨城県の北端より約150kmも北方の宮城県宮城郡七ヶ浜町に、江戸時代の文化9（1812）年から伝わるオウムガイが現存す

¹ 〒701-1221 岡山市北区芳賀5111-3-203

¹ 5111-3-203, Haga, Kita-ku, Okayama 701-1221, Japan

² 岡山大学農学部水系保全学研究室 〒700-8530 岡山市北区津島中1-1-1

² Conservation of Aquatic Biodiversity, Faculty of Agriculture, Okayama University, Tsushima-naka 1-1-1, Kita-ku, Okayama 700-8530, Japan

る (Fig. 2). 筆者の一人岡本は、近畿大学文芸学部
の藤井弘章准教授によるウミガメ祭祀に関する論文
(藤井 2013) を通じてその存在を知り、同氏のご教
示と七ヶ浜町教育委員会の仲介によって、2回にわ
たり実物を検する機会を得た。本稿はその報告であ
ると同時に、東北地方太平洋沿岸における漂着物研
究の進展に向けた注意喚起をも意図したものである。

七ヶ浜町へのオウムガイ漂着の経緯

七ヶ浜町は、宮城県の沿岸中部に位置し、多賀城
市・塩竈市の東側に接する自治体である。地形的に
は、奥羽山脈から派生する松島丘陵の東端にあたり、
町域全体が海に向かって突出した半島状をなし、面
積は約13km²である (Fig. 1)。「七ヶ浜」の地名は、
江戸時代に半島の沿岸に七つの浜 (集落) があつた
ことに因んでいる。

オウムガイが保存されているのは、同町内に在住
する鈴木信也氏の自宅で、同家では「ふけつの貝」
という名称で呼ばれ、ウミガメに伴って漂着したと
の伝承が残っている。さらに、2件の文献史料 (女
流文学者の只野真葛が著した紀行文『いそつたひ』
と、仙台藩への届出文書『亀霊神社不死貝由来』)
にも漂着の経緯が記録され、伝承の信憑性を高めて
いることが特筆される。両文献は、七ヶ浜町におけ
るウミガメ祭祀の起源に関する史料として藤井氏の

論文に収録されているので、経緯を詳細に知ること
ができる。このうち、『亀霊神社不死貝由来』は、
当時の肝入が「亀霊神社」と「不死貝」の由来を仙
台藩に届け出た文書の控えて、七ヶ浜町の加藤家に
伝わっている。藩への届出は、漂着から約半世紀後
の安政5 (1858) 年であるが、内容自体は文化11
(1814) 年に記録されたものである。この文献によっ
て、経緯を以下に簡単にまとめる：

文化7 (1810) 年、鈴木家の先祖である漁師の
儀兵衛という人物が、沖合で漁をしていたときに
ウミガメに遭遇し、酒を飲ませて海に放した。翌
年も同様の出来事があり、さらにその翌年の文化
9 (1812) 年夏には、みたびカメが現れ、今度は
背中に貝を付着させていた。このときカメは重い
傷を負っており、介抱の甲斐なく死んでしまった。
カメは寺院の境内に埋葬され、付着していた貝は
儀兵衛宅に置かれていた。そのしばらく後、儀兵
衛宅に立ち寄った常陸国加波山の行者がこの貝を
「ふけずの貝」と呼び、カメを祀れば漁の繁盛を
もたらすと云ったので、儀兵衛たちはカメを埋葬
した場所に祠を建立し、「亀霊神社」として大切に
祀るようになった。

以上のように、「ふけつの貝」(ないし「ふけずの
貝」「不死貝」) は、ウミガメの背中に付着して七ヶ
浜の海に到来したと伝承されている。『亀霊神社不
死貝由来』では、貝を伴ったウミガメの漂着と、ウ
ミガメ祭祀の開始に重点が置かれ、貝自体への言及
は少ない。一方、文政元 (1818) 年刊行の『いそつ
たひ』ではもう少し詳しく、旅人 (『亀霊神社不死
貝由来』の「行者」に相当) が貝を見て「得がたき
ものなるを、今よりは宝とせよ」と助言したのを機
に、大切に祀り始めたとの聞き書きを記している。

オウムガイが日本本土に漂着することは、古くか
ら知られていた。天保14 (1843) 年に刊行された貝
類図譜『目八譜』(武蔵 1843) には、オウムガイ
(鸚鵡介) の彩色図とともに、説明文の中で相模・
伊豆・安房地方の海岸に稀に漂着することが記され
ている。七ヶ浜町のオウムガイを記録した『いそつ
たひ』は、『目八譜』よりも年代の遡る文献であり、
歴史的にも貴重な漂着事例といえる。

ところで一点気になるのは、各史料に見える「ウ
ミガメにオウムガイが付着していた」という記述で
ある。これは、付着生活をしないオウムガイの生態
から考えると奇妙な印象を受ける。この記述を肯定



Fig.1 Map showing Shichigahama-machi, Miyagi Prefecture.

的に解釈するならば、発見時には生きたオウムガイが偶然ウミガメに付着していたとも考えられる。また、両者は別々に見つかり、神秘性を強調するために物語にいくらかの脚色が加えられた、という解釈も成り立つ。この点はもはや検証不可能であり、ウミガメ付着の真偽はどうあれ、何らかの要因でオウムガイが七ヶ浜にもたらされ、祭祀の対象となったという出来事自体を重視すべきであろう。

漂着オウムガイの現状と履歴

七ヶ浜町に漂着したオウムガイの殻（Fig. 2）を今回検討したところ、この個体は従来から知られるオウムガイ（例えば窪寺 2000）と形態的特徴が共通しており、疑いなく同種と考えられる。大きく破損して住房は完全に失われ、隔壁も5枚目までが部分的に破損して外部に露出しているため、生時の正確な殻サイズは不明であるが、残存部分の最大径は85.6mm、最大幅は56.4mm、重量は約65gであった。多くの人の手に触れたためか、表面は黄色がかった

光沢を帯びている。殻表の放射色帯は11本が鮮明に残っており、内唇の黒い彩色および内面の真珠光沢もよく保存されている。

さて、漂着から現在までの約200年間、このオウムガイはどのように扱われてきたのであろうか。

上述の『いそつたひ』によると、著者の真葛が鈴木家を訪れた時点では、オウムガイは白木の箱に収納されて丁重に扱われていた。しかし入手当初は単に珍しい貝という認識で、行者がその価値を伝えるまでの間に、多くの人が殻を打ち欠いて持ち帰ったり、所有者自身も内部の海水を抜こうとして隔壁を割ったりしたという。真葛はさらに、貝を手にとって観察し「貝いとあつく、外の色は白くて、茶色に、とらふのごときかた有。中は夜光貝に似て、こまやかなることは、いたく増れり。内に汐こもりて、打ふれば、こをこをと鳴ながら、いさゝかもこぼれ出ず」と、殻の模様や気房に海水が入り込んだ様子など、漂着オウムガイの特徴を正確に描写している。なお、『いそつたひ』では貝の名称を「浮穴の貝」と表記している。



Fig.2 A drifted shell of *Nautilus pompilius* to Shichigahama, Miyagi Prefecture. Handed down and preserved by the Suzuki Family since 1812.

また、鈴木家の先代当主であった鈴木捨五郎氏の証言によれば、この貝で酒を飲むと18歳に若返るといわれ、かつて結婚式やフナオロシ（進水式）の場で酒杯としても使われていた。遠くは九州まで全国各地に貸し出されていたこともあり、その過程で殻は元の大きさからかなり小さくなっている（藤井 2013）。現在は酒杯としての使用や外部への貸し出しは行っておらず、木箱に収納して大切に保管されている。

このオウムガイは、これまで『七ヶ浜町誌』（七ヶ浜町誌編纂委員会 1967）、『七ヶ浜町観光ガイドブック平成20年度版』（七ヶ浜町役場観光課 2008）および藤井氏の論文（藤井 2013）に写真が掲載されたことがある。しかし各文献とも、オウムガイであることも含めて詳細な説明はない。

一方、南方熊楠は論文「本邦に於ける動物崇拜」（南方 1910）の中で『いそつたひ』の要約を載せ、カメが背負ってきた貝を「鸚鵡螺」と書いている。南方が七ヶ浜町のオウムガイの存在を知っていた、あるいは実見の機会があったかどうかは不明である。しかし『いそつたひ』での貝の描写はかなり具体的で、博学の熊楠にとっては、オウムガイと特定するには十分だったであろう。

以上のように、七ヶ浜町のオウムガイは、実物と文献の両面から断片的な紹介はなされてきたものの、その情報は広く共有されるに至らず、今日まで頭足類や漂着物の研究者の情報網から抜け落ちていた。

縁起物としてのオウムガイ

前述の通り、鈴木家ではオウムガイを「ふけつの貝」と呼称している。現在、「ふけつ」には定まった漢字表記はなく、『いそつたひ』における「浮穴」のほか、「富結」の字を当てることもあるらしい（七ヶ浜町役場観光課 2008）。この「ふけつ」という名称にも、オウムガイに対する当時の人々の認識がうかがえる。

『目八譜』では、オウムガイ（鸚鵡介）の別名として11の名称を挙げている。そのうち九穴介・九穴螺・フメツカヒ・ウケツ・不結貝・不滅介・不穴螺の7例もが「ふけつの貝」と同音ないし類似した発音とみられることは、これらの名称に何らかの関連性があることを示唆している。また、『亀霊神社不死貝由来』における呼称「不死貝」「ふけずの貝」も、やはり同系の名称とみてよいであろう。

上記の諸呼称の中で最も注目されるのは、「九穴

（くけつ）」という語である。「九穴の貝」とは、通常は「9個の出水孔が開いた想像上のアワビ」を指す語であり、その肉を食した者に不老長寿をもたらす貝と考えられてきた（矢野 1989, 大場 2000）。例えば、福島県喜多方市の金川寺には、「九穴の貝」としてアワビの殻が保存されており、その肉を食べた女性が驚異的な長寿を得たとする、いわゆる八百比丘尼の伝承が残っている（佐々木 1985）。その一方で、『目八譜』が記録する通り、江戸時代の時点で「九穴の貝」の語はアワビだけでなく、オウムガイをも指すようになっていた。おそらく、連室細管の穴が1個ずつ空いた隔壁が多数連なる様子を「九穴」と表現したのであろう。

実際に、日本海側の新潟県においては、現在でもオウムガイを「九穴の貝」と呼び、宝物として保存している事例がある。例えば、同県三島郡出雲崎町の念相寺には「九穴の貝」という名称のオウムガイが伝わっており、筆者（岡本）も実見した（Fig. 3）。この個体は最大殻径140mmで、殻表は褪色して放射色帯や内唇の黒い彩色部も不鮮明であるが、「九穴」を強調するためか殻の一部が切断されて内部の気室が見えるように施され、また連室細管の穴も人工的に大きく拡張されている。

寺伝によれば、このオウムガイは、当地を訪れた音羽御前（源義経の忠臣である佐藤継信・忠信兄弟の母）が大病を患った折、海から出現した蛇の頭に載っていたもので、その肉を食したところ病は全快したという（念相寺 1996）。もちろん史実とは考え難いが、物語の中に、動物に付着した状態で海から出現する、病氣平癒や不老長寿の効用が謳われるという、七ヶ浜町の事例と共通の要素が見出せる。

以上のことから、「ふけつの貝」という名称の由来は、オウムガイの別称「九穴の貝」であったとみてよい。そして、伝播の過程で名称が「ふけつ」に転訛して本来の語義が忘れられ、さらには語呂合わせ的に「老けず」「富結」「不滅」「不死」といった、不老長寿や富貴を意味する吉祥語に結び付けられていったとの仮説が導かれる。その到達点のひとつが、七ヶ浜町であったということであろう。そして、オウムガイを尊ぶ風習の発祥地は、やはり漂着例が比較的多い地域とみるべきであり、特定の地域に絞ら込むことは難しいが、実際に伝世品が残る新潟県も候補地の一つに挙げられよう。

藤井（2013）は、ウミガメ祭祀習俗の伝播における民間宗教者の果たした役割を指摘している。七ヶ浜町の事例の場合、行者によってオウムガイにまつ

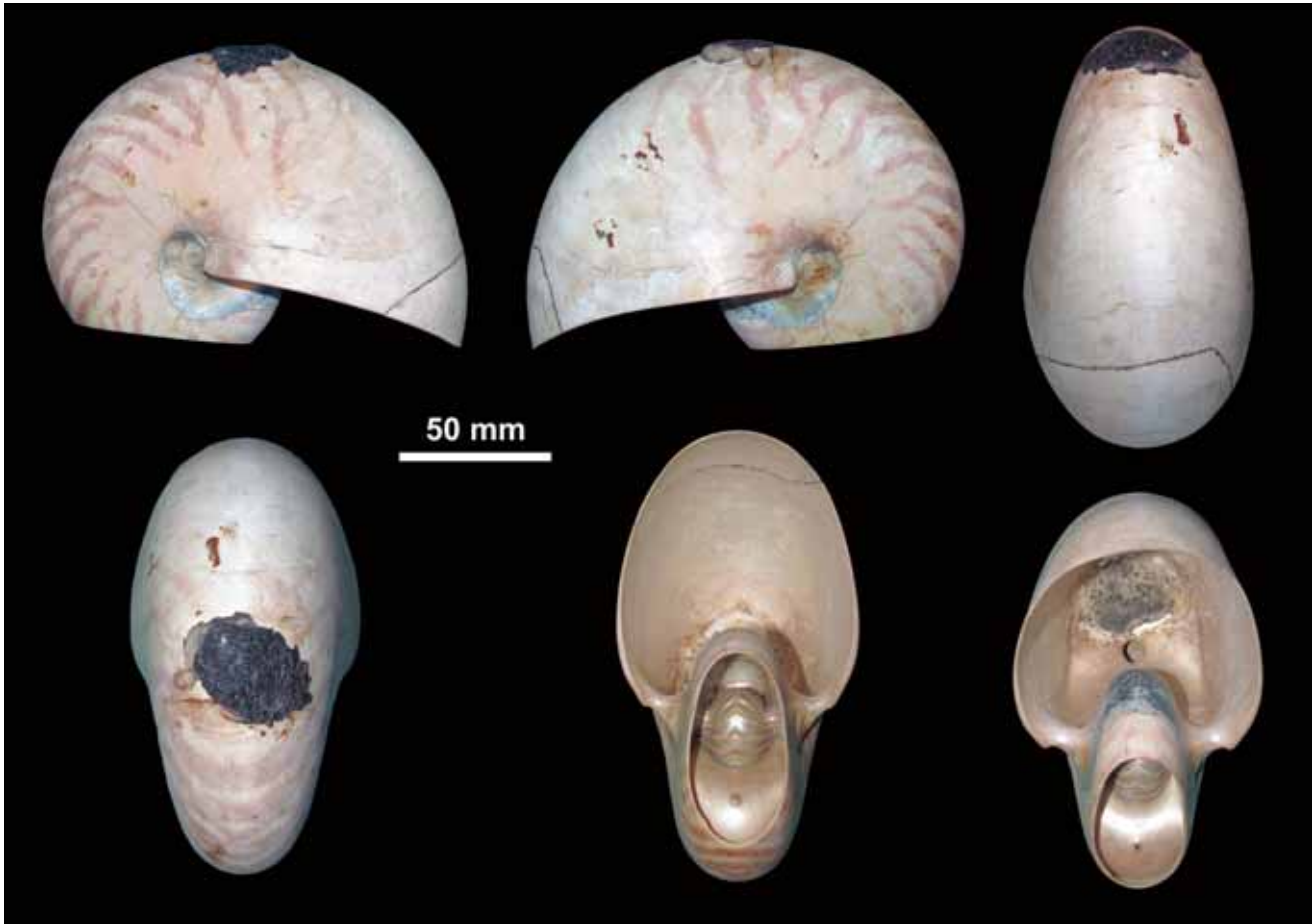


Fig.3 A drifted shell of *Nautilus pompilius* to Izumozaki, Niigata Prefecture. Handed down and preserved by the Nensoji Temple.

わる祭祀も同時に伝播したわけであり、民俗事象の伝播とその過程での変容がうかがえる点で興味深い。

とはいえ、オウムガイにまつわる民俗事象を論ずるには、その類例自体が極めて乏しいのが現状である。漂着が比較的多い地域においても、決してありふれたものではなく、オウムガイに特化した祭祀の形式が存在したとは考えにくいので、他の貝類にまつわる習俗をも視野に入れて考察する必要がある。オウムガイと日本人との関わりを解き明かす作業は、今後の調査の進展に待つところが大きい。

まとめ ー七ヶ浜町のオウムガイの意義ー

最後に、七ヶ浜町のオウムガイが有する意義と、今後の課題を列挙してまとめとする。

第一に本例は、熱帯地域からの漂着物の報告がほとんどない東北地方太平洋岸での発見例という点である。その漂流ルートは、日本海から津軽海峡を抜け、三陸沖を南下する津軽暖流に乗った可能性が指摘できる。岡本は2014年に、仙台市と名取市の海岸でココヤシ果実を拾得したほか、日本海側から流入

したとみられる韓国製の過酸化水素容器も確認している（岡本 2015）。こうした実例を踏まえれば、東北地方太平洋岸へのオウムガイの漂着は稀有ではあっても、決して絶無ではなく、今後の調査によっては新たな発見も期待できるだろう。

第二に、江戸時代にさかのぼることが確実な、漂着年代の古さである。類例として挙げた新潟県出雲崎町の事例も相当古いことは間違いないが、残念ながら年代を特定するための文献史料を欠いている。本例は、所蔵者宅に残る伝承のみならず、当時の文献の記載からも漂着の裏付けが取れる稀有な事例といえる。おそらく文献資料を伴ったオウムガイとしては現時点で国内最古の事例であり、その歴史的価値は極めて高い。

第三に、当時および近現代における、人々のオウムガイに対する認識がうかがえるという民俗学的な意義である。オウムガイを不老長寿をもたらす貝と解釈し、大切に保存する風習は、現時点では新潟県に類例が求められ、民俗事象の伝播という観点からも興味深い。今後「オウムガイの民俗」に関する研究を進展させるためには、各地に埋没しているかも

しれない類例の発掘と精査が望まれる。

このような何重にも貴重な資料を、今日まで大切に保存してこられた鈴木家の方々には心から敬意を表するものである。今後は、上記のような資料の重要性に鑑みて、例えば町指定の重要文化財などとして、より充実した保護体制のもとに置かれることを望んでいる。

そして、東北地方太平洋岸における漂着物研究の在り方についても一言しておきたい。七ヶ浜町のオウムガイや仙台市のココヤシが実証するように、本地域にも熱帯産の動植物は確実に漂着している。これまで報告がなされていないのは、漂着頻度の低さだけではなく、漂着の可能性自体があまり意識されておらず、研究者の数も少ないことも一因ではなかろうか。それだけに開拓の余地が大きく、従来の漂着物学の知見を補完ないし修正する研究成果も期待できる分野でもある。東日本大震災からの復興とともに、研究者に限らず多くの人々の目が海に向かい、新たな発見がもたらされることを期待する。

謝 辞：本稿の作成にあたり、七ヶ浜町の鈴木信也氏、念相寺住職の佐藤亨氏には、所蔵オウムガイの調査をご快諾いただいた。近畿大学文学部の藤井弘章准教授、七ヶ浜町教育委員会の菊池克宏氏、田村大樹氏からは、オウムガイの所在や文献についてのご教示をいただいた。寺泊水族博物館の青柳彰氏、漂着物学会の茨木靖氏、林重雄氏からも多大の御教示、御協力をいただいた。ここに記して心より御礼申し上げる。

引用文献

- 藤井弘章. 2013. 江戸時代におけるウミガメ祭祀の成立過程—宮城県七ヶ浜町の伝承と新出資料の比較を通して—. 渾沌 10: 23-48.
- 浜田隆士. 1965. オウムガイ類の遺骸漂流. *Venus* 24: 181-198, pl.20.
- 池田 等・倉持卓司・竹山 紘. 2006. 相模湾沿岸に漂着したオウムガイ（軟体動物門：腹足綱）の記録. 神奈川自然史資料 (27): 87-88.
- 石井 忠. 1999. 新編漂着物事典 海からのメッセージ. 391 pp. 海鳥社, 福岡.
- 小松崎三枝. 1907. 常陸大津水産動物. 動物学雑誌 228: 307-311.
- 窪寺恒己. 2000. オウムガイ科. 奥谷喬司 (編), 日本近海産貝類図鑑, pp.1048-1049. 東海大学出版会, 東京.
- 久保田信・榎山嘉郎・山本泰司・田名瀬英朋・湊 宏・小山安生. 2010. 和歌山県白浜町沿岸へのオウムガイ（オウムガイ科）の漂着記録4例. 南紀生物 52: 79-80.
- 南方熊楠. 1910. 本邦に於ける動物崇拜. 東京人類学会雑誌

- 291: 325-342.
- 武藏石壽. 1843. 日八譜 卷之九. 著者自刊, 江戸. (国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287304>により閲覧)
- 中西弘樹. 1990. 海流の贈り物 漂着物の生態学. 254pp. 平凡社, 東京.
- 念相寺. 1996. 真宗大谷派楽邦山念相寺 開基四二五年略しおり. 14pp. 念相寺, 出雲崎.
- 西 浩孝. 2013. 渥美半島に漂着したオウムガイ. 豊橋市自然史博物館研究報告 (23): 33-34.
- 大場俊雄. 2000. あわび文化と日本人. 176pp. 成山堂書店, 東京.
- 小島郁生・加藤 秀. 1987. オウムガイの謎. 197pp. 筑摩書房, 東京.
- 岡本泰典. 2015. 仙台市宮城野区蒲生に漂着したココヤシ果実. 宮城の植物 40: 29-32.
- 佐々木長生. 1985. 会津の八百比丘尼に関する資料. 磐城民俗 25: 17-25.
- 七ヶ浜町誌編纂委員会編. 1967. 七ヶ浜町誌. 997pp. 七ヶ浜町, 七ヶ浜.
- 七ヶ浜町役場観光課. 2008. 七ヶ浜町観光ガイドブック平成20年度版. 31pp. 七ヶ浜町, 七ヶ浜.
- 矢野憲一. 1989. ものと人間の文化史62 鮑. 321pp. 法政大学出版局, 東京.

(Received Aug. 31, 2015; accepted Sept. 28, 2015)